

山羊

川崎ゆきお

富岡はナイフで山羊の首筋をこするように斬る仕草をする。

「いいか、山羊の目を見て殺さないといけないんだ。そうすれば山羊も覚悟する。見てやらなければ駄目なんだ」

小学生たちの目は真剣だ。

動物写真家の富岡は小学校から呼ばれて話をするようになった。

野生の証明という写真集は、動物の表情がよく捕らえられていることで、国際的な賞もとっている。

「いいかい、山羊がかわいそうだと思うのなら、しっかり目を見てやるんだ。それが情けだ。じっと見つめてやると、観念して、死んで逝くのがよく分かるんだ」

富岡は、そのときのことを思い出したのか、目が血走っている。

ゾクッと冷たいものが子供たちに走った。

「おまえは死ぬが、俺の体の中で、その肉が活かされるんだ。動物はな、悔やみごとや、恨みごとなんて言わない。殺し合うのがルールなんだ。それが自然なんだ。食うか食われるかなんだ」

子供たちは理解しようとしていた。少なくとも、ここは小学校の教室で、授業だ。耳をふさぐわけにはいかない。

「そして、死ぬ瞬間、ぐっと抱き締めてやるんだ。命をありがとうと礼を言ってな。山羊から力が抜けていくのが分かるんだ。それを抱きしめることが大事なんだ。それが人間としての礼儀なんだ」

泣き出す女の子がいた。

「先生はどうして山羊を殺したの？」

今まで、黙って聞いていた一人が発言した。

「食べるためだよ」

子供たちは山羊など食べたことはなかった。

「お金がなかったの？」

富岡は質問の意味が分からない。まだ、殺人鬼のような目をしている」

「ご飯を食べるお金がないから山羊を食べたの？」

意外な質問だった。

「土地の習わしで、山羊を食べるんだ」

「おいしいの？」

「うまくはない」

「じゃあ、食べなくてもいいじゃん」

富岡は言葉に詰まった。

「山羊の表情を、しっかり見てやるんだ。それが人間としての礼儀なんだ」

「だったら、殺さなければいいんだよ」

了